

第一部

松岡俊三の戦い

大正15年12月、松岡は肺炎のため済生館に入院した際、多くの幼児が肺炎の急患で入院してくるが次々と亡くなっていくのを見て（入院できず死亡する幼児はさらに多かった）、このような悲惨な状況は「雪の害」のためであると考えた。雪は農作物を害し、人々を雪（家屋）の中に閉じ込め、収入をとぎす。よって積雪が雪国に及ぼす害を災害と認識し、台風や地震の被害と同じように国が救済すべきであると考えた。



松岡俊三 新庄町（市）にて（雪の里情報館 提供）



今和次郎設計の実験農家（雪の里情報館 提供）

第二部

雪害調査所

昭和8年9月、最も熱心な新庄町（松岡の選挙区であり、政治運動を熱烈支持していた）沼田に、積雪地方農山漁村の経済更生に関する調査・研究・指導機関が設置された。

雪害調査所の特色は、調査・研究だけではなく「指導」を含んでいることである。調査所が行う各種の調査・研究の成果を伝達することも必要とされている。雪害調査所の仕事は次の3つの部門に分れる。それぞれの部門には第一級の学者・研究者が集められた。

- I. 一般農家経済に関する調査研究とその改善指導
- II. 雪の科学的研究
- III. 副業的農村工業の振興

第三部

農家副業としての民芸品

雪害調査所はその業務の一環として、積雪地方における農家副業（民芸品）の振興を企画し、この調査と指導を柳宗悦らに委嘱した。山口所長が考える民芸品とは、あくまでも民衆の生活用に供するものであり、日本の伝統的精神である素朴にして健康しかも誠実な心が滲み出ている品であった。この思いが柳らのすすめる民芸と共通していた。こうして柳らは、求めに応じ「民芸の会」を結成し、最上郡を手始めに東北一円の民芸品の調査を進めていく。民芸の会の主要メンバーは、柳のほか、河井寛次郎（工芸家）、浜田庄司（陶芸家）、芹沢銈介（染色家・デザイナー）など、職業はさまざまであるが、それぞれの立場で民芸運動を支えた人々であった。



ペリアン来訪（雪の里情報館 提供）